

これからの展覧会

- 12月16日(土) ▶ 12月24日(日) 第66回国際写真サロン入選作品展
 1月 5日(金) ▶ 1月28日(日) 新春特別展示 棟方志功と芹沢銈介
 2月 9日(金) ▶ 3月11日(日) 特別展 東島毅展
 1月30日(火) ▶ 3月11日(日) 特別陳列 東海道五十三次 大正漫画絵巻を中心に

広重の五十三次の大正時代版を気取って制作された「東海道五十三次漫画絵巻」。それは大正10年(1921)に、18人の新聞漫画家たちによって水彩画風に仕上げられた肉筆の寄書絵巻です。岡本一平、近藤浩一路、下川四郎らが参加しており、中でも細木原青起(1885-1958)は、岡山県津山市生まれの郷土ゆかりの画家です。今回の特別陳列のきっかけとなったのは、当時150本作られた絵巻のうちの2本が当館に寄託されたこと。各作家の個性豊かな表現を紹介し、あわせて広重の「東海道五十三次」、池田遙邨筆「昭和東海道五十三次」(倉敷市立美術館蔵)なども展示します。



岡本一平 「日本橋」



細木原青起 「白須賀」

美術館講座

- 2月 3日(土) 「岡山の漆芸家 難波仁齋について」
…………… 福富幸(学芸員)
- 3月 3日(土) 「東島毅の絵画」… 廣瀬就久(学芸員)
- 3月24日(土) 「イサム・ノグチ 岡山での横顔」
…………… 山吹知子(学芸員)

・時 間 いずれも午後2時～午後3時30分
(開場は午後1時30分)

・会 場 ■ … 2階ホール(定員210名)
■ … 地下1階講義室(定員70名)

・聴講無料、事前申込み不要、先着順

社会人のための美術の夕べ

- 12月22日(金) 入門・岡山美術⑤
岡山ゆかりの工芸作品について解説します。
- 1月26日(金) 棟方志功と芹沢銈介をみる
棟方と芹沢、それぞれの作品が溢れる力強さと優しさに迫ります。
- 2月23日(金) 東島毅展をみる
圧倒的な大画面に囲まれながら、美術の「いま」を体感します。
- 3月23日(金) 入門・岡山美術⑥
岡山ゆかりの洋画作品について解説します。

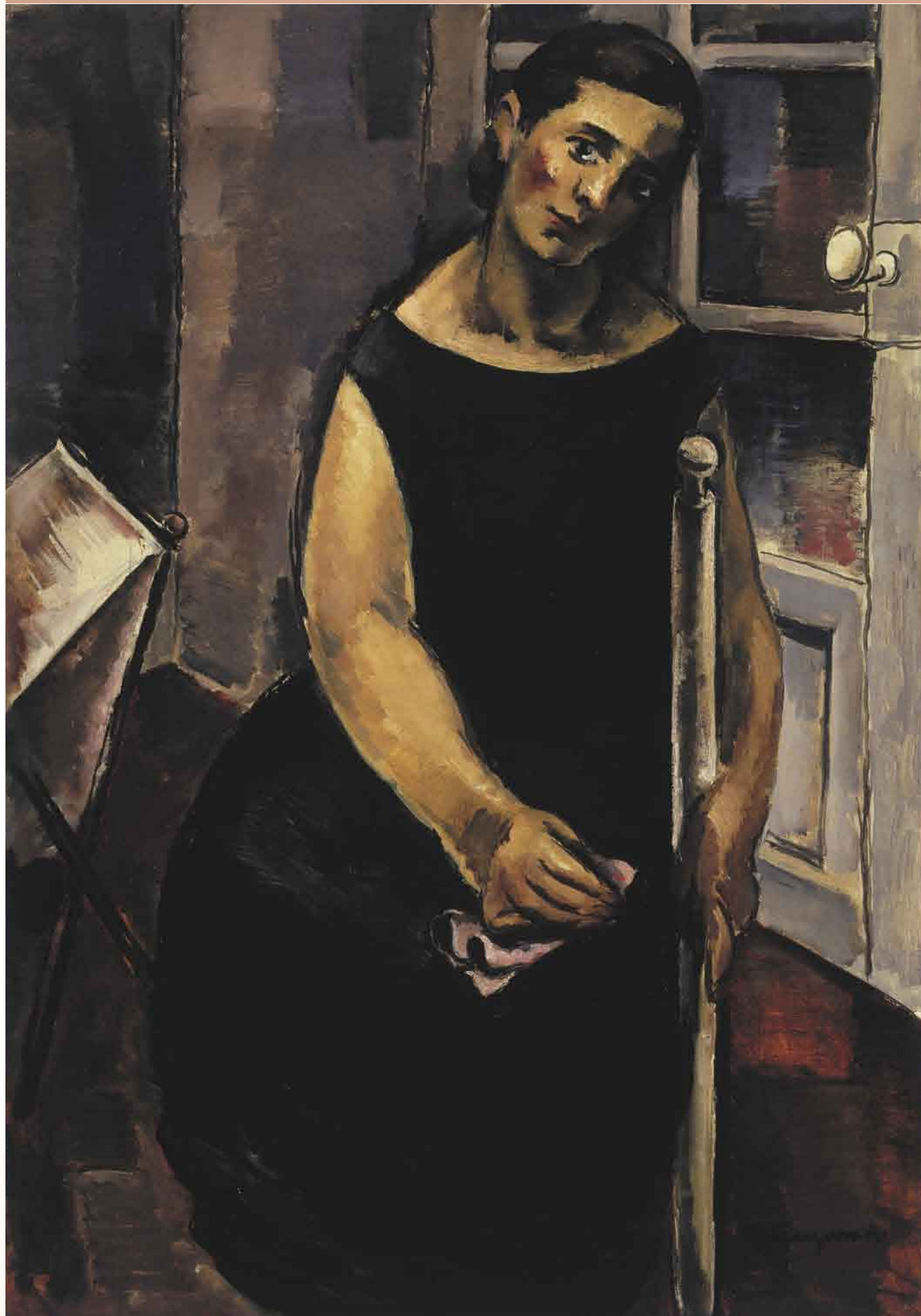
・時 間 午後6時～午後7時
 ・会 場 2階または地下1階展示室
 ・募集人数 約20名(事前申し込み不要)
 ・参加費 ■ 常設展観覧料 / ■ 各企画展観覧料

編集後記

Time flies — 時間は飛ぶように過ぎていく—

今年ものこすところわずか、時の流れのはやさに毎年のことながら驚いてしまいます。

クリスマスの雰囲気少し心が華やいだ後は、ほっこりと温かな年越しをしたいものです。お正月のざわめきが落ち着いたら、ぜひ新春特別展示へおかけください。棟方志功の情熱的な版画と、芹沢銈介の華やかな作品がお迎えいたします。(T.Y.)



中山 巖「黒衣の女」

特別展開催のお知らせ

・新春特別展示「棟方志功と芹沢銈介」・特別展「東島毅展」

*新春特別展示 棟方志功と芹沢銈介

神仏や文学、故郷への想いなどを主題に、情熱的で生命力溢れる版画作品を数多く生み出した棟方志功(1903-75)と、人々の暮らしや自然などにあたたかな眼差しを向け、温和で洗練された模様の着物やのれん、屏風などを遺した芹沢銈介(1895-1984)。

両者の作品はそれぞれに明るく、生きることを祝福するかのような力を湛えています。また二人はともに、民芸運動の旗手であり高い審美眼を持つ柳宗悦(1889-1961)の強い影響を受けながら、日本の伝統技術の中に独自の世界を切り開いた作家です。そして、この岡山の地にも多くの足跡を遺しました。

本展では、およそ70点の作品によって、棟方志功と芹沢銈介の美の境地を紹介します。

(学芸員 山吹知子)

棟方志功(宇田頌 東西の欄)
棟方版画美術館蔵芹沢銈介
(木路地型絵染二曲屏風「春夏秋冬」)
宮城県美術館蔵

会 期 平成19年1月5日(金)～1月28日(日)

休 館 日 1月9日(火)、15日(月)、22日(月)

主 催 岡山県立美術館、山陽新聞社

助 成 財団法人 福武文化振興財団

*特別展 東島毅展

このたび当館では、岡山県ゆかりの現代美術作家を個展形式で紹介する初めての展覧会として、「東島毅展」を開催いたします。

東島毅氏は1960年に佐賀県生まれ、筑波大学大学院を修了後、ロンドンそしてニューヨークにて活動しました。その作品はニューヨーク在住時から注目され、1996年には、現代における優れた平面の作家に贈られる「VOCA賞」を受賞しました。翌年に帰国後は岡山市に在住し、制作活動を続けています。

様々な媒体による表現が交錯する現代の美術にあって、東島氏は絵画の表現がもつ可能性を探求し続けてきた作家です。見る者を包み込むかのような圧倒的な印象を与える大画面には、筆致の交錯と色彩の重なりがもたらす、絵画ならではの豊かな表情を見ることができます。東島氏は一時期、濃紺を基調とした静謐な絵画を制作していましたが、近年は変化に富んだ色彩が復活するなど、その制作活動には新たな展開が秘められているようにも見えます。

本展覧会では、このような東島氏の活動を、未発表のドローイングや新作も交えながらご紹介します。どうぞご期待ください。

(学芸員 廣瀬就久)

東島 毅 《Nioの顔分》
油彩、アクリル・カンバス
2005 京都造形芸術大学蔵

会 期 平成19年2月9日(金)～3月11日(日)

休 館 日 2月13日(火)、19日(月)、26日(月)、3月5日(月)

開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
※2月23日(金)は午後7時まで開館
(入館は午後6時30分まで)

主 催 岡山県立美術館

会期中のイベント

■作家によるフロアレクチャー(担当学芸員との対談形式による)
2月 9日(金:開会日) 15:00～16:00
2月12日(月・祝) 14:00～15:00

■ゲストによるフロアレクチャー
(講師:水戸芸術館現代美術センター主任学芸員 森 司 氏)
2月17日(土) 14:00～15:00

■担当学芸員によるフロアレクチャー
2月23日(金) 18:00～19:00

■担当学芸員によるスライドレクチャー
「東島毅の絵画」
3月3日(土) 14:00～15:30 当館ホールにて

中山 巍
NAKAYAMA Takashi
「黒衣の女」
油彩・キャンバス
116.7×80.3cm／本館蔵

この作品は、中山巍(1933～1978)のバリ滞在中(1929～1938)の作品で、おそらく中山のアトリエでモデルを使って描いたもの。同時期の「画室の男」の背後にこの作品が描き込まれている。「画室の男」にはモデルの女性の座っていたらしい椅子も描かれている。この椅子はこの時期の中山の作品に繰り返し登場する身近なモチーフでもあった。女性は首をかしげ、体と

腕 衣服の線の繋がりにはモディリアニの肖像画を参考にしたのではないかと思われる。中山は室内画家といってもいいほどで、終身近な椅子や花瓶などの小道具類を巧みにアレンジしながら、色彩対比やフォルムによる近代的な造形を追求し続けた。(主任学芸員 妹尾克巳)

美への憧れ 天上への道



岡山県副知事
山口 裕視

私が心から尊敬し、憧れている哲学者はギリシャのソクラテスである。もともと、哲学の専門教育を受けていない者の哀しさで、ギリシア語はおろか、先人のすぐれた研究書、注釈書の数々を何ら知ることなく、手軽に手に入る岩波文庫をときに読み返しながら、ソクラテスを慕っているにすぎない。

紀元前5世紀のアテネに生き、ひたすらに知を愛し、真なるもの、善なるもの、美なるものの本質を求め続け、「哲学の祖」といわれるこの偉大な哲学者は、知を愛し、希求することについて実践の徒でありつづけた。知をつきつめるための対話は、やがて特定の人々の反感を買い、市民裁判で死刑判決を受けて毒杯を仰ぐことになる。

ソクラテスの著作は遺っていないから、ソクラテスの思想や姿は弟子プラトンの対話篇を通じて知ることができるのだが、そのソクラテスは、人間の魂について、あるイメージをもっていた。対話篇「パイドロス」などにそのイメージは読み取れる。

魂は翼の生えた二頭の馬とその御者にも似ている。という。一頭の馬は性質よく美しい優れた馬、もう一頭の馬は醜く気性も荒い。御者は二頭の馬のバランスをとりながら駆けなければならない。一見荒唐無稽のようだが、しかし、私たちの心は、時に善と悪がせめぎ合い、葛藤を覚えることを思えば、すぐれた比喩ではないだろうか。

更に、ソクラテスは、魂は不滅で転生すると信じており、魂の転生について神話(ミュトス)の形で語る。

魂の馬車は、ギリシャの神々に交じって天翔けており、その天空の高みで、真なるもの、美なるものの真実の姿をみている。しかし、神ならぬ身の魂は、馬たちを操り損ねて翼を傷つけ、天上から落下して人間の肉体の中に生まれ落ちる。人間は、かつて天上でみた美の真実の姿のことは忘れ果てているのだが、しかし、美しいものや、美しい人を観たとき、かつて見た美の本質のことをかすかに想起し、感動して心がふるえるのだという。そして、美の本質に憧れ、それを求め続けた人生を送った者の魂は、天上の神々の行進の列に、早く戻るができるという趣旨のことも述べられている。

今時、このような神話は、幼児でも信じることはないだろう。

この度就任された山口裕視副知事は、大の美術ファンであるとのこと。そこで、寄稿をお願いしました。

ただ、それでも私はこの神話に憧れるし、信じてみたい、と思う。きれいごとだけでは決してすまされないこの世に生きて、時に足首までぬかるみに浸かった気分のため息をつくこともあるが、そんなときに、この美しい神話はどれほど慰めになることか。また、ときにささいな我欲にとらわれ、矮小な感情にからめられそうになる私自身にとって、この神話は何よりの戒めでありつづける。

たとえば美術館で美しいものを観るとき、かつて天上でみた美の本質の、遠い記憶がよみがえるのか、いずれにしても感動して私たちはそれに見入る。そのときに、心は未だ天上に戻れなくても、無意識のうちにその高みを遙かにのぞんでいるのだと思う。

感動、熱中する、というenthusiasmという言葉は、enという「入る」という意味をもつ部分と、thouという神に関連した意味をもつ部分のあわさったものなのだそうだが、うっとりとするこの気持ちは、まさに神の中に向かう、入る、ということなのかもしれない。美術館やいろいろな場所で、美しいものに向かうとき、人々は世俗の様々を忘れ、感動し、我を忘れて見入る。その忘我の先は、美の本質を観ることができると天上への道につながっているのかもしれない。

私はいつの日か、再び翼をえて天上の行進に加わり、私の視線の先に、敬愛するソクラテスがいることを夢見る。太った醜い姿と、黄金のような素晴らしい心をもっていたという偉大な賢者の傍らで、やはり今と同じように苦勞しながら、その後を見失うまいと二頭の馬を駆っていくことを夢見てしまう。



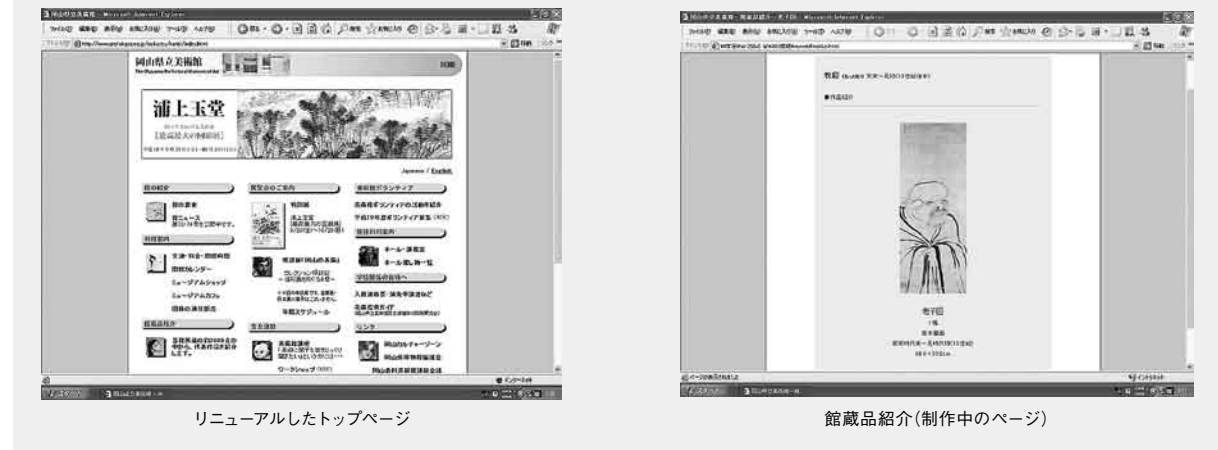
「アテナイの学堂」(部分) ラファエロ・サンツィオ "Scuola d'Atene" Raffaello Sanzio ローマ ヴァチカン宮「署名の間」

http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/index.html

ホームページをリニューアル!

10月1日より当館ウェブサイトは一部リニューアルをしました。もうご覧いただけただけでしょうか? 利用者のニーズにより応えていこうと、4月より計画されたウェブサイトのリニューアル化も、紆余曲折を経てようやくひとつのカタチを提示することが出来ました。

今回のリニューアルのポイントとしては、トップページのデザイン変更が挙げられます。これまでの当館ウェブサイト寄せられた声の多くは、知りたい情報になかなかアクセスできないというものでした。ボタンやページのデザインに一貫性がなく、利用者にとっては、「見にくい」「わかりにくい」ものでした。リニューアルしたトップページでは、全てのページ内容が一覧できるインデックス型にすることで、利用者が目当ての情報に効率よくたどり着けるよう配慮しました。またトップページ冒頭には、開催中の特別展などを紹介する大きなスペースをとり、当館の一押し情報を視覚的にPRします。



また、リニューアルしたWeb Siteでは、今皆さんが読んでいるこの『美術館ニュース』もPDFファイルで公開していますし、館蔵品紹介や英文表記のページなども追加してゆく予定です。今後もWeb Siteを通じて様々な情報サービスを提供していきたいと考えています。(学芸員 齋藤武郎)

常設展のここに注目!

作品、その不在のあらわれ

当館では通常「企画展」と「常設展」の二つの展示会を開いています(ただし、展示会の規模や時期によっては、どちらか一方の場合もあります)。「常設展」は、当館が収集した作品、あるいはご寄贈・ご寄託いただいている作品を中心に構成されていますが、場所や作品保護の関係から、展示されているのは収蔵作品のごく一部です。それでは、他の作品はどうなっているのでしょうか。大部分は収蔵庫で次の展示まで待つこととなりますが、なかには館外に出ているものもあります。他館で開催される展示会に貸し出しているのです。例えば、原田直次郎の<風景>(明治19年作)は、「森鷗外と美術」展に出品中のため、再び当館で展示されるのは年明け以降となる予定です。この展示会は、その名が示す通り、森鷗外と「美術」に焦点を当て、鷗外の美術批評や鷗外と交流のあった画家による作品を中心に構成されています。そのため、明治19年に留学先のドイツ(ミュンヘン)で出会い、以後親交のあった原田の作品が展覧されているのです(なお、鷗外の『うたかたの記』の主人公巨勢は、原田がモデルとされています。興味のある方はご一読を)。

日本各地、時には世界に出張する作品たち。いまここ、当館の「常設展」には不在であっても、どこかで人々の眼に触れている作品があるのです。皆さまが旅先で訪れた展示会に、もしかしたら当館の収蔵作品も出品されているかもしれません。「この絵はどこかで...」と思われた時、それはひょっとして岡山県立美術館で目にしていただいていた作品かもしれないのです。(学芸員 細田樹里)



原田直次郎<風景>

よそちの展覧会

- ① アート・プログラム in 岡山市立市民病院 [企画:ガレリア・プント] 10月2日-10月27日 岡山市立市民病院
- ② 緑川洋一・中村由信が見た伊吹島の産育習俗 [企画:伊吹島研究会] 10月14日-10月23日 瀬戸内海歴史民俗資料館[高松市]

①は、岡山市内の画廊「ガレリア・プント」が企画して、病院内の様々な場所に期間限定で現代美術を展示したプロジェクト。過去に同ギャラリーで紹介されたベテランから若手作家、さらには大学・高校・絵画教室の学生・生徒を含む46人(グループ)による主として平面作品が、建物の1階から7階にわたって、廊下壁面や階段の踊り場などに、賑々しく登場した(写真:ガレリア・プント提供)。



様々な発展の可能性が認められた。1つは恒久設置の可能性である。依頼者の要望をもとに、設置される場所がもつ物理的な条件を踏まえながら、作家との打ち合わせも行いつつ、許された予算の範囲で耐久性の保証された作品を設置することになるのだろう。ここでの全体の展示プランがプロデューサーの腕の見せどころということになる。ところで、病院に設置された美術は誰のためのものなのだろうか。すでに多くの美術作品が設置されている駅

「浦上玉堂展」後記

9月29日から10月29日の間、〈最高最大の回顧展〉と銘打って当館で開催された玉堂展が無事終了しました。入館者数は23,370人。分りにくいから入らないという危惧をよそに予想以上の反響があり、館員一同喜んでます。ともあれ、玉堂(1745-1820)は当館が建つ場所で誕生したわけですから、正真正銘の里帰り展でした。ゆっくり鑑賞するには多すぎる作品数(234件の8割が常時並んでいた)でしたが、玉堂ワールドに存分に耽っていただけではありません。その結果として、玉堂がすぐれた画家であり、音楽家であり、詩人であることを認めていただければ幸いです。玉堂フアンの一員としては、さらに彼の生き方、在り方から現代人が失いがちの何かを感じ取っていただけならもっと嬉しいといったところでしょうか。所蔵家の皆様や協力者各位に深く感謝いたします。なお、本展

前広場や目抜き通りの場合は、「通行人」という画一的な鑑賞者を想定しうが、病院の場合は、外来患者、入院患者、見舞い客あるいは勤務者など、異なる立場の鑑賞者が存在する。病院とは、人によっては訪れるに過ぎない場所であるが、ここで生活している人や働いている人もいる。この立場の違いによって、必要とされる美術のあり方は変わってくるのではないだろうか。

入院患者の場合を例に挙げよう。ひとたび病院が訪問先から滞在先になるや、時間の進み方が大きく変わる。定められた日課から外れたことによるある種の解放感とともに、時は静かに流れ、自然と内省的な気持ちになる。直島のベネッセハウスは、部屋毎に異なる美術作品が設置されており、予約時に宿泊したい部屋を選択することができるが、壁に掛ける作品を患者が選べるような入院病棟が将来出現するかもしれない。漫然とテレビを見るだけではなく、ビデオ・アートやアーティスト・ブックとともに過ごす選択肢もあり得よう。リハビリに意欲が出るような部屋や器具のデザインが積極的に検討されていけば素晴らしいことだと思う。

病院での美術のあり方は、多様な鑑賞者層を想定することによって、多面的かつ豊かな展開が期待できる。

②は、香川県の伊吹島にあった、新生児を連れた母親が集って生活をともにする「出部屋」の習俗を、2人の写真に当時使用されていた生活用具や産着などの資料を交えて紹介した展示会。この出部屋を、島の歴史的な遺産として後世に語り継ごうとする企画者・伊吹島研究会(代表:三好兼光氏 http://www6.ocn.ne.jp/~kmiyoshi/)の熱意がひしひしと伝わってきた。展示されていた緑川の「伊吹島物語」26点は、今年1月31日から3月5日まで、当館の常設展でも紹介した作品であるが、当時彼に師事していた中村由信も同じ機会に取材していただくことが分る。これらの写真が当時の出部屋の状況を知るにあたって貴重な資料になるとのことである。戦後初期は全国のアマチュアカメラマンがドキュメンタリーを志向した時期であった。今もどこかの家庭のアルバムの中に、高度成長期に失われた貴重な歴史の記録が埋もれている可能性がある。(学芸員 廣瀬久久)

は千葉県美術館との共同企画であり、成果のほとんどは千葉というベストパートナーを得たことから生まれたこともお伝えしたいところでした。(学芸課長 守安収)



浦上玉堂展 展示風景